

大正十五年八月廿五日 印刷
大正十五年八月廿八日 發行

人類學上より見たる西南支那

定價金 六圓

著作者

鳥居龍藏

編纂者

巽軒會



發行兼
印刷者

東京市神田區通神保町九番地

會社 富山房

右 代表者 坂本嘉治馬

發行所

東京神田

會社

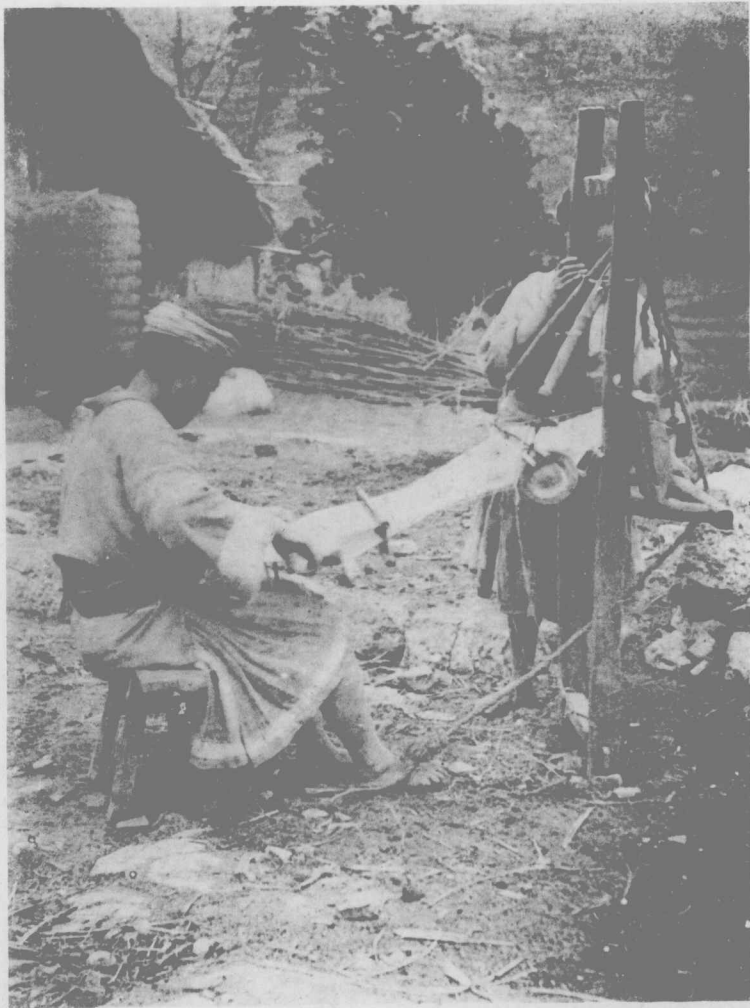
富山房

電話神田三四、二四、二四番
振替東京五〇一番

維新以來、我國運の發展を裨補する者、教育に政事に軍事に産業に異才輩出し、偉績殊勳、人の耳目に新なり、而して學會亦其人に乏しからず。就中吾巽軒井上先生の如き、居然其の泰斗たり。先生夙に東洋哲學の研究に従事し、儒教、佛教及び神道等に於て其開發闡明する所少しとせず。先生學問淵博、強記は其天性なり。而して廣く哲學に倫理に宗教に將た又社會問題に關し、犀利卓抜の見あらざるなし。餘技文學に及び詩歌の創作も亦曾て之あり。且つ先生夙に國體を尊び、國民の道義を進むるを以て自ら任さなす。網常の先生によつて維持せらるゝもの、大なりと謂ふべし。先生の我文化の發展に於ける其功績、豈に鮮少なりとせんや。今や先生歸已に古稀に達して精力毫も衰へず、讀書研鑽、壯者を凌ぐの概あり。客歲以來吾輩先生の教若くは恩を受くる者、胥ひ謀りて巽軒會を組織し、一は以て先生の壽を祝し、一は以て先生の學を念とせんと欲す。因りて茲に巽軒叢書を發行し、以て之を事實の上に表すといふ。

大正十三年十月吉日

巽軒會 同人



(影撮者著) 所る織を布麻女婦苗白の貢坡省州貴

謹で本書を井上先生に捧ぐ

著者

凡 例

本書は極東文化の爲めに常に研究せられ、尙ほ余の研究に對して常に熱心なる教示の勞を取らるゝ井上先生に向て奉呈する目的を以て公にしたのである、唯だ内容の最も拙ないのは余の恥ずる所である。

本書は余が明治三十五年七月から同三十六年三月まで九ヶ月間に涉つて東京帝國大學から支那人類學上苗族調査として出張を命ぜられた時の日記である。這は余の人類學調査の餘暇に日々見聞したる事項を何くれこなく筆にまかせて記したもので、固より論文報告ではない。これ等の論文報告は別に發表する考であるが、その中の『苗族調査報告』は明治三十九年五月に余は東京帝國大學から出版した。

此の日記は余の大學助手時代に記したもので、今から見ると、その着眼その他に餘りに幼稚な所がある。けれどもその幼稚な所は當時余

の青年時期の若々さであつて、その懐しい紀念として日記の文章に一つも加筆や削減等を施さず、その儘にして置いた。

余の旅は、普通の遊山的旅行と異なり、當時に於て未だ何人も試みざりし苗族・獠族の調査にあるを以て云はゞ探檢的性質を帶ぶるものである。その間に於ける天然人爲の困難は實に非常であつた。余は以上の重大なる調査と天然人爲の危険・不便の餘暇を日々利用して燈火の下で記したものが、此の日記である。

此の調査に就て當時の東京帝國大學の恩師先輩・南清各地の領事館・貴陽及び成都の武備學堂・東京地學協會の各位に負ふ所が頗る多い。尙ほ個人としてはその際、中橋徳五郎・内藤湖南・岸田吟光及上海樂善堂の人々・白岩龍平氏等の各位及びその他の各位より受けた賜も多かつた。これ等は茲に記してその厚意を感謝する。

余の調査・旅行に就て支那官私人から受けた保護・便宜等は頗る多い。

これ等は茲に謹て深謝する所である。日支親善はまさにこれである。南支那に於ける苗族・獏猓等の調査は邦人として今日の所では余の仕事が最初であつて、これが又最後の様な感がする。けれども此の調査は未だ未完のものであつて、余はこれより更に嶺南各省から印度支那等の方面に向つて延長的調査を試みんと欲する希望を有するものである。當路者は余の如き官學者ならざる浪人學者に向ても研究を大成せしめられんことを望むものである。

余はつねにフムボルドのコスモス等の書を愛讀して居つた。その感化として自然に接觸することを好んだものである。余の旅行中専門的に餘暇ある際は、いつも出來得べきだけ、草花を採集したが、これ等の採集品は歸京後その専門家に贈つた。これは余の旅行中最も慰安の一つであつた。

撮影寫眞は本書中に可なり多く挿入する考えであつたが、これ等は

すべて現今は人類學教室の所藏となつて居つて一寸出すに困難であるから、先づ手許にあるもののみ少し許りを用ゐることとした。

○日記中には、土地の標高はすべてバロメートルをもつて示して置いた。溫暖表は最初の所のみこれを記して、途中からこれが省略せられて居るのは、寒暖計を破損したからである。

本書印刷の校正等に就ては野村寅治氏を煩はし、佐藤醇吉氏は余の横穴の寫生を模寫せられましたから茲に感謝の意を表す。尙ほ獮獮の挿畫は當年十六歳の娘、緑子の筆になつたものである。

大正十五年七月二十九日

鳥居人類學研究所にて

鳥居龍藏

人類學上より見たる西南支那 目次

第一章

旅行の目的と其の發程……………一

舜と苗族……………四

法衣を着して剃髮せんとす……………六

第二章

武陵縣に到る……………九

武陵桃源の傳説と其の地の遊覽……………一〇

第三章

伏波將軍の廟に詣ず……………一六

辰州の風俗……………二〇

辰州より西風潭へ……………二四

第四章

支那と楊柳……………二六

關帝廟に芝居を観る……………三三

第五章

舟行いよ／＼困難……………三六

湖南兇暴の俗……………四〇

黃猷珍氏の宴會……………四五

第六章

洪江司より連州へ……………四九

黔陽に達す……………五二

第七章

陸行貴州に向ふ……………五七

羅籐甸より沅州城……………六〇

便水に宿す……………六三

湖南省最終の地……………六四

第八章

貴州省初めて苗族を見る……………六六

貴州省の風俗習慣……………七〇

苗族と支那人……………七三

第九章

青溪縣

苗族を見つゝ鎮遠府へ

鎮遠府市街を見る

第十章

漢苗衝突の遺跡を偲びつゝ

第十一章

山上通路の状態

苗族の老女

施平城

第十二章

愈々苗地に入る

第十三章

苗族の村落

新黄平城

第十四章

重安方面の黒苗風俗……………102

第十五章

地理と苗族の生活状態……………114

第十六章

花苗の風俗……………119

第十七章

貴陽府と侗家苗……………124

第十八章

白苗・青苗及び打鐵苗……………128

第十九章

入蕃の苗族地の調査……………134

第二十章

明代の遺民鳳頭鷄……………137

第二十一章	安順府の位置と青苗とその口碑……………	一四
第二十二章	安順の花苗と模様樂器……………	一四九
第二十三章	花苗の風俗……………	一五
第二十四章	古代文字探究路上の狛家苗種……………	一六〇
第二十五章	紅岩山上の古代文字と羅猓の關係……………	一六四
第二十六章	諸苗と里民子……………	一六九
第二十七章	朗岱の諸蠻種……………	一七四

第二十八章

狛家苗とその市場……………一七六

第二十九章

毛口驛より花貢へ……………一八四

貴州省と雲南省の境界近づく……………一八六

第三十章

雲南省に入る……………一八九

第三十一章

甲狀腺子のある人民……………一九四

霑益州城……………一九八

第三十二章

雲南省の他の「石敢當」……………二〇〇

馬龍城とその知州……………二〇一

第三十三章

州知事の觀兵と忠象碑……………二〇五

第三十四章

關索嶺……………二〇九

回々教の寺院の寺院……………二二二

第三十五章

雲南省地方の茶園……………二二五

江州瀨田に似た美景……………二二八

第三十六章

雲南府附近の地形と散密羅猓等……………二三一

第三十七章

雲南府城に到着す……………二二七

第三十八章

雲南府城内の所見……………二三〇

第三十九章

雲南府に於ける古代遺物……………二三九

佛國人の勢力……………二四〇

第四十章

雲南省南部への第一歩……………二四五

春秋一時の景色……………二四七

第四十一章

七孔關坡より路南へ……………二五三

獼猴と出會……………二五六

第四十二章

獼猴の調査……………二五九

路南廳に向ふ……………二六三

第四十三章

路南の獼猴の土地に入る……………二六五

第四十四章

廣東河上流の獼猴……………二六八

第四十五章

花口附近の狛家苗……………二七五

第四十六章	彌勒附近の獏猯	二六
第四十七章	通海へ――途中の花苗	二六七
第四十八章	高麗狗と花苗の家屋	二九一
第四十九章	十八砦に於ける獏猯	二九六
第五十章	黒獏猯の村落	三〇一
第五十一章	阿者獏猯の村落	三〇七
第五十二章	婆兮の市街	三二二